

細川高国の切腹と大物・富松・京都

田中 勇

たなかいさむ
『尼崎市史』を読む会
第一巻分科会チユーター

享祿四年（二五三）三月、細川高国は播磨守護の座を望む浦上村宗（当時、播磨守護代）に擁されて堺の細川晴元を攻めたが、阿波の三好元長の加勢を得た晴元方の反撃に遭って天王寺に退いた。六月、阿波からの援軍や木沢長政などの加勢により大軍となった三好・晴元方が天王寺の陣を攻撃し、高国方を打ち破ったのである。尼崎の大物城は前年一月に薬師寺国盛が降参してのち高国方の拠点となっていたとみられ、大敗した高国はそれだからこそ大物に逃げ込んだのであろう。後世の人びとは哀れを込めて、高国勢の凄惨な敗戦を「大物崩れ」と表現したのだった（『重編応仁記』）。

この合戦時の戦い振りを伝える「東寺光明講過去帳」（『姫路市史』第八巻、平成一七年刊所収）には、「浦上掃部助嶋村以下没河衆壹万余人云々」と表現されていることが新たにわかった。この「…没河衆…」を「河に没した衆が壹万余人」と読めば、従来の『細川両家記』（以下、『両家記』）の解釈と変わらず「河で水死した衆が一万人」となるが、「没するところの河衆」と読むと「大物崩れ」のとらえ方が変わってくる。

「河衆」が水軍を意味するとすれば、数日にわたる堺の細川晴元や三好元長など阿波衆との諸合戦は、従来陸上戦と理解されてきたものが、実は水上戦ないしは河戦であったことになり興味深い。「大物浦」は、淀川河口部から尼崎辺の大阪湾沿岸浦々という広義の地域名である。したがって、「大物崩れ」は、「大阪湾北岸の浦々における水上戦での大敗」を意味すると考えることが可能となる。そして、両細川家当主間の覇権争いの裏には、次代の雄となる実力者である阿波守護代三好氏と播磨守護代浦上氏との大阪湾の経済的利権を巡る争いがあり、尼崎と堺はそれぞれが拠点とした港湾都市であったとの

仮説が成り立つ。魅力的な仮説と考えるが、いかがであろうか。

さて、尼崎の大物で高国が捕われ、自刃した状況描写は、今まで同時代に編纂された『両家記』の記載に依拠して、京屋「紺屋」に隠れていたところを見つかり、大物広徳寺にて切腹したとされていた。

ところが、近年ようやく公刊された室町後期の貴族の日記「二水記」（東京大学史料編纂所編『大日本古記録 二水記 四』）では、享祿四年六月四日の記事に「午後風聞云、摂州之儀、常桓（高国法名）敗軍凡落居云々」と述べ、さらに「言語道断之儀」と嘆いている。さらに「八日 常桓今眺於尼崎京屋切腹云々、不便（不憫）言語道断之儀也、運命至極之故歟、只一人切腹、彼「被」官一人無之云々、無念之次第歟、三好山城寺「守」令姪灼（介錯）云々、一日一夜及酒宴」と書き綴っていることが明らかとなった。

この「日記」という毎日の生の記録によれば、高国は尼崎京屋において従う家臣一人も無く、単身で切腹したことになる。介錯したのは晴元方の三好山城守（一秀力）

である。三好山城守は高国と「一日一夜」の酒宴をして末期の酒杯を交わし、高国の辞世句も彼が関係者に届けたいらしい（『両家記』）。そうであれば切腹後の遺骸を丁寧に供養した人物は山城守自身と考えてよいだろう。そして、その供養をした寺院が広徳寺と考えられる。「二水記」という今まで衆目に触れなかった日記によれば、今流布している大物広徳寺での自刃説は、『両家記』を下敷きにして生まれた口承ということになる。

ここで、京屋の商いも再検討してみたい。紺屋（染物屋）説・酒屋説があるが、敗れたとはいえ戦国武将である高国自刃の場となったのであるから相当規模の家であろう。応仁の乱の少し前、文安二年（一四四五）当時、西国一帯では阿波以外の地域で染料の運漕記録が無く、阿波が唯一の藍生産地・積み出し地であったという（今谷明『戦国三好一族』新人物往来社、昭和六〇年刊）。このことと「紺屋」という記載（『両家記』）から、当時の西国諸港と都を結ぶ港湾都市尼崎に、藍玉商・藍玉荷問屋の存在を想定することができる。さらに、京屋という屋号から考えられる京都との関係の強さも考慮すれば、本業は為替

商・両替商であつたとも考えられる。

当時の京都には、高国の側近である「政商」坂東屋富松氏がいた。永正から大永期（一五〇四～二八）にかけて、奥州大名伊達家の古文書に登場する富松氏久は坂東屋の一族と見なしてよいだろう（東京大学史料編纂所編『大日本古文書 伊達家文書』）。坂東屋は東国商人相手に盛んに遠隔地取引をすると共に、蔭では東国政情を睨む高国側近としても活動していたのである。東国浪人衆である東衆を率いる高国と、京都の坂東屋（店舗の推定地・現京都市下京区坂東屋町）・尼崎京屋は、為替の流通を通して深い関係があつたものと私は推測している。

ここで高国切腹当日の様子を伝えるもう一人の公家・三条西実隆は、日記に「後聞、今日卯刻常桓生涯云々言語道断」（『実隆公記』）と短く記し、文人仲間でも深く交際していた高国の死を悼んでいる。高国は辞世の句を彼に遺している（『両家記』）。高国切腹二日後の十日、実隆亭に坂東屋入道と坂東武士二人が訪問して連歌の指導を受けたと記されている。辞世の句を持参したのであろう。同十三日条に「坂東屋今日焼亡不便云々」、同十四日条

に「坂東屋悉焼亡、皆逐電」とある。高国の滅亡により、政商の坂東屋が京都を退去したとみられる。しかし、これらの記載内容（連歌指導、坂東屋焼亡「放火か」と家人逐電）を一連の出来事として確定するには、高国の死という観点からさらに検証を重ねる必要があると考えている。

